『逃げるは恥だが役に立つ』論

―ハイ・モダニティにおける第三波フェミニズムの視点から―

比較文明学研究室　B4

中山采泉

本研究の目的

- **『逃げ恥』がなぜ現代の日本に登場し、人々の心を掴んだのか、また、この人気が示す日本社会の現状と課題をフェミニズムとハイ・モダニティ論を使って説明すること**
- 主人公らが直面する問題を紹介しながら、日本社会におけるフェミニズムの課題とはなにか、本作品の人気が日本のフェミニズムにとってどのような意味を持ちうるのか示す。
- また、ギデンズのハイ・モダニティ論及びその前提となるコンフルエント・ラブの概念を引用することによって、『逃げ恥』で主人公二人が実践した関係性を説明することを試みる。
- さらにフェミニズムとハイ・モダニティの関係性についても言及する。

研究方法

- 2019年に現代思想に寄稿された**菊池夏野の「『逃げ恥』に観るポストフェミニズム」を主たる参照軸**とし、同論への批判を試みる。
- 菊池の主張は、「逃げ恥はポストフェミニズム的な物語であり、ネオリベラリズム的な解決をはかるコンフルエント・ラブの理想によって、ジェンダー不平等を覆い隠しているに過ぎない」というものである。
- 本研究は、ポストフェミニズムではなく第三波フェミニズムの観点から『逃げ恥』の内容や影響を説明することによって、作品のキャラクターに特徴的である「コンフルエント・ラブ」に基づく人々の関係性が視聴者や社会に与える影響を肯定的に捉え直すことを目指す。

本論の構成

第1章　**はじめに**
1.1　研究背景
1.2　研究の目的
1.3　研究方法
第2章　**逃げ恥とは**
2.1　『逃げるは恥だが役に立つ』とは
2.2　『逃げ恥』のあらすじ
2.3　主要な登場人物
第3章　**フェミニズムの系譜と第三波フェミニズム**
3.1　フェミニズムとは
3.2　第一波フェミニズムの理論
3.3　第二波フェミニズムの理論
3.4　ウーマンリブ運動後の第二波フェミニズムの理論
3.5　現代のフェミニズム
3.5.1　ポストフェミニズム
3.5.2　第三波フェミニズム
3.5.3　現代フェミニズムまとめ
第4章　**『逃げ恥』とフェミニズム**
4.1　『逃げ恥』とポスト＆第三波フェミニズム
4.2　菊池夏野の『逃げ恥』批評
4.3　愛情の搾取という問題
第5章　**コンフルエント・ラブとは**
5.1　ギデンズのコンフルエント・ラブ
5.2　コンフルエント・ラブと民主制
第6章　**ハイ・モダニティ**
6.1　ハイ・モダニティとは
6.2　ハイ・モダニティと第三波フェミニズム
第7章　**『逃げ恥』とハイ・モダニティ**
7.1　『逃げ恥』に観られるコンフルエント・ラブ
第8章　**結論**
8.1　『逃げ恥』はポストフェミニズム的であるか
8.2　『逃げ恥』はハイ・モダニティにおける第三波フェミニズム的作品である
参考文献

『逃げ恥』とは

- 2016年にドラマ版がヒットした漫画作品で、主人公のみくりと平匡が住み込みの家事代行を結婚に偽装することから始まるラブストーリー。

©海野つなみ「逃げるは恥だが役に立つ」1巻

- みくりは大学院を卒業するが、派遣切りにあって無職となった。住み込みで家事代行の仕事を続けるために結婚を偽装する。この契約結婚から恋人関係を経て、書類上も正式な結婚をし、最終的には「共働きの夫婦」に至るのだが、「仕事としての家事」「契約」を軸にストーリーが展開される。家事労働の有償化をはじめとして、フェミニズムが提起してきた問題がストーリーに織り込まれている。

これまでのフェミニズム（日本）

1. 第一波フェミニズム（英米18世紀→日19世紀）・・・女性参政権を獲得
2. 第二波フェミニズム（日1970s）・・・女性役割を否定「**個人的なことは政治的なこと**」
3. バックラッシュ期（日2000s）・・・ジェンダー・バッシング，反フェミニズム

⇩現代は

1. ポストフェミニズム・・・フェミニズムは達成済（もう必要ない）
   →性別役割を自己選択の結果として肯定（ネオリベ的）
2. 第三波フェミニズム（米1990s→日2010s）・・・フェミニズムは未達成
   →視点・方法を変えて続く

「私的アジェンダを私的空間そのもので問い直す」

ポストフェミニズムとは

- ポストフェミニズムを担う女性とは、「第二波フェミニズムにおいて獲得した「自由」で「自立」した女性像を学び、制度も整備されてはいるものの、ロマンスや伝統的な女性的価値を捨てフェミニズムの示した女性像に従って生きることには不安を感じている」女性たちである（菊池2019）。
- ポストフェミニズムの思想・・・「男女において不当な差別はなく、あるように見えてもそれは『区別』や『差異』、もしくは『自由な意思・選択の結果』に過ぎない」という捉え方。
- ⇒しかし現在の日本において、フェミニズムが達成されたと実感できる場面は少ない。高橋は、ポストフェミニストの認識は個人的な体験に基づいていると指摘しており、構造的な問題を捉えられていないという問題がある。
- 現代日本は、ポストフェミニズム的な言説やバックラッシュによって第二波フェミニズムの成功を実感できないばかりか、弊害が意識されてしまう社会状況ではないか。

第三波フェミニズムとは

- フェミニズムは達成されたとするポストフェミニズムに対して、第三波フェミニズムは、従来とは異なる形でフェミニズムの実践を試みる立場である。
- 思想：男女の二分法的概念そのものを問い直し、多様な『女性』『女らしさ』の在り方に目を向ける
- 運動の特徴：ポピュラー文化という私的空間でフェミニズムを展開
- 日米の違い：日本では階級や人種が問題にされない

ポストと第三波の違い

- 大きな違いは、フェミニズムを先に進めようとするか否か。シェリー・バジェオンは、ポストフェミニズムは、「女たちが、自分たちの状況にもっとも合うと感じられるようにみずからのアイデンティティを構築する能力をフェミニズムが制限している」と示唆し続けているが、第三波フェミニズムは、後期近代において「生きられた経験がますます複雑になってきている」ため、「女たちがその生を特徴づけている矛盾により引きつけてフェミニズムとの関係を構築」することで、「フェミニズムの価値と実践についての既存の定義に対する深い異議」を申し立てると説明している。（バジェオン2020）

逃げ恥はポスト？第三波？

菊池の逃げ恥論に対する批判

- **菊池の主張**（2021）：『逃げ恥』はポストフェミニズム的であり、新自由主義的イデオロギーによってジェンダー不平等を覆い隠している。
- →例：百合の発言「『女の呪い』（年齢差別）から逃げなさい」⇒年齢差別を個人の問題に追いやり、差別を維持する社会への問いは不可視化される。
- ⇒**本研究の主張**：年齢差別が残っていることを指摘する表現は、メディアを通じたポストフェミニズム批判となっており、「私的空間での問い直し」という第三波的視点で評価できる。

逃げ恥は第三波フェミニズム

菊池の逃げ恥論に対する批判

- 百合「そんな（年齢差別）恐ろしい呪いからは逃げてしまいなさい」「私が虚しさを感じることがあるとすれば。貴方のように感じている女性が、この国にたくさんいるってこと」（最終話シーン43：p440）
- ⇒社会の構造的な問題として提示しているとは言えないだろうか。
- ⇒菊池のように『逃げ恥』をポストフェミニズム的作品として定式化することは難しい

コンフルエント・ラブ

- 個人的魅力と相性に基づいて愛情を育む**ロマンティック・ラブ**（特徴：「自己投影的同一化」という互いの差異のうえでの一体性が追求されるため、男女の差異は重要であり、女性が男性に隷属すべきという考えも強化される（ギデンズ1995））

- ⇕

- 対等な関係を前提とし、合理的な関係が能動的な話し合いと合意によって継続される**コンフルエント・ラブ**（特徴：関係性の継続を価値のあるものとするに十分な利益が二人の関係から互いに得られる点を認め合う。（ギデンズ1995））

- これから⇒コンフルエント・ラブと民主制のつながりを説明することで、『逃げ恥』によるフェミニズムへの貢献――第三波フェミニズムの実践――の説明につなげていく。

コンフルエント・ラブと民主制

- コンフルエント・ラブの概念が友人や家族の関係に拡張されたもの→「純粋な関係性」
- 「純粋な関係性」とは、自立によって相手への敬意をもち、暴力を禁止し、関係性の開始・継続・解消のすべての意思決定に参加でき、互いに説明義務を負う対等な関係性のことである。
- この「純粋な関係性」が個人生活の民主化の実践となっている。（ギデンズ1995）

コミュニケーションの取り方を議論する二人（11巻）

コンフルエント・ラブと民主制

- 個人生活の民主化を実現することが進歩的な市民文化を醸成するための必要条件であり、市民文化の再生という下からの改革を積み重ねてはじめて開かれた民主主義社会は出来上がる。（ギデンズ2001）
- ⇒コンフルエント・ラブ／純粋な関係性の実践の実現をもって、政治における民主制が再帰的に機能する。
- ⇒**フェミニズムを前に進めるには、まずコンフルエント・ラブの実践から始めなければならない**ということを意味する。
- それが実践される社会こそがハイ・モダニティ社会である。

ハイ・モダニティ

- モダニティの特徴は、社会関係を特殊な位置づけの呪縛から解放し、広範な時間―空間の中に知識として再統合するメカニズムであった。
- ハイ・モダニティ社会とは、そのようなモダニティの再帰性が、メディアの発達やグローバル化によって、より徹底され、制度的文脈だけでなく、個人の自己アイデンティティの形成及び親密な関係性においても同様に機能する社会を指す。（ギデンズ2021）
- つまり、私たちは多様な選択肢と可能性による混乱の中で、自己を再帰的に形成しなければならない。（ギデンズ2021）

ハイ・モダニティとフェミニズム

ハイ・モダニティ社会と第三波フェミニズムを生み出した社会の関係

- かつてのフェミニズムの運動や女性としての経験も、それぞれが経験された時間と空間から分離され、知識として一般化された。
- しかし、そのように蓄積されたフェミニストのアイデンティティは、固定的なものであった。そこから、女性性の中に複雑性を認める動きとして登場したのが第三波フェミニズムである。（バジェオン2020）
- つまり、モダニティの特徴によって集約された知識を取り込み、自分たちの生きられた経験と照らし合わせながら知識を更新していくという第三波フェミニズムの手法は、まさに再帰性の徹底されたハイ・モダニティ的運動なのである。

『逃げ恥』に観られるコンフルエントラブ

- 雇用主と労働者という関係の主人公の二人は、環境の変化に合わせて契約内容に変更が生じるたびに、話し合いによって条件を決定する。
- 契約結婚関係から恋人関係、夫婦に移行してもなお、意思決定の方法は変わらない。
- つまり、「純粋な関係性」が「コンフルエント・ラブ」として維持される。

家事の分担を提案するみくり（6巻）

菊池の『逃げ恥』批評への批判

- **菊池夏野**：このような「コンフルエント・ラブ」の物語が、新自由主義的なイデオロギーによってフェミニズムの提起してきた問題を覆い隠している
- **本研究**：仮に、構造的な問題が提示されて制度が整ったとしても、差別は一朝一夕になくなるものではない。日常で起こっていることだからこそ、日常の親密な関係性のレベルにおいて根本的に解決されなければならない。
- 『逃げ恥』は、そのような下からの解決を目指すフェミニズムの手法として承認されるべきである。

『逃げ恥』と視聴者

- 情念の民主化の表象がドラマを通じて伝えられることで、実際の職場や家庭でのコミュニケーションとの比較が生じ、自分たちが情念の民主主義の実践といかに遠い位置にいるかを知ることにもなる。
- その意味で、『逃げ恥』の人気は「日常生活における情念の民主化」から始まる民主主義の民主化を望む無意識的な願望に裏付けられているかもしれない。
- また、恋愛と結婚を切り離して描いたことによって、恋愛それ自体は人権抑圧的な仕組みではなく、フェミニズムと両立できるということを示した。

結論 1

- 『逃げ恥』をポストフェミニズム的であるとすることは難しく、むしろ第3波フェミニズムとして評価すべき。個人主義的な解決に拠らず、差別への共感と理解を誘うものであった点、ポピュラー文化を通して視聴者にフェミニズムとの接触を新しい形で提供している点から、第三波フェミニズム的な作品であると評価可能。
- 性別差別の根本的な問題解決のために、コンフルエント・ラブによって民主主義の素養を社会に根付かせることが必要であり、『逃げ恥』において実践されている。
- 第三波フェミニズムがポピュラー文化空間を通して市民の私生活に結び付き、生きられたフェミニズム的知識や問題意識が多様性を保ったまま「常識」として共有されることが第三波フェミニズムの目指すところであり、ハイ・モダニティ社会の再帰的特徴によって実現可能なアプローチである。

結論 2

- この作品で示された一見突飛な契約結婚が、意外にもまともな仕組みである一方、現実の家庭空間では、コンフルエント・ラブすら実践されていないという気づきが、人々の注目を集め、手に入れられていないコンフルエント・ラブへの欲望が人気の形で現れたのではないか。
- そのような欲望があるならば、『逃げ恥』の視聴者は、フェミニズムはすでに達成されたと考えることからは遠い位置にあるはずである。
- 私たちは、第三波フェミニズムの視点や手法を取り入れながら、今後も女性解放の達成に取り組み続けなければならない。

参考文献

- 海野つなみ，2012－2021，『逃げるは恥だが役に立つ』，講談社1巻－11巻.
- 菊池夏野，2021，「『逃げ恥』に観るポストフェミニズム　結婚／コンフルエント・ラブ／パートナーシップという幻想」，『現代思想，＊特集＜恋愛＞の現在』，青土社，p120-129.
- ギデンズ，松尾精文・松川昭子訳，1995，『親密性の変容：近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』而立書房.
- ギデンズ，秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳，2021，『モダニティと自己アイデンティティ：後期近代における自己と社会』筑摩書房.
- ギデンズ，佐和隆光訳，2001，『暴走する世界：グローバリゼーションは何をどう変えるのか』ダイヤモンド社.
- シェリー・バジェオン，芦部美和子訳，2020，「成功した女性性の矛盾：第三波フェミニズム、ポストフェミニズム、そしてさまざまな「新しい」女性性」現代思想48 (4), 169-183,青土社.
- 他